

騾先生

李晴

(岩田温子訳)

私たちの村は小さな村だった。学校も小さく、たった一間の教室と、たった一人の先生、そして二十数人の生徒と鐘が一つあるだけだった。私が学校に入った年、勢い良く動き回る十数人のいたずらっ子たちに先生一人では太刀打ちできず、騾先生(ラバ先生)に応援を頼み、私たちを教えに来てくれることになった。その当時すでに先生は六十歳を超えた老人だった。

決して先生の苗字が騾(ラバ)というのではなかった。本当の名前は李洪騾、幼い時には騾駒子(ラバの子)と呼ばれ、字の上手な先生だった。学校の庭の奥には一本の榆の老木があり、その樹のてっぺんは枝や葉が生い茂り、天をさえぎり、日陰をつくっていた。その樹の枝に鐘が掛けられていた。ダーン、ダーン、ダーン、時を告げる鐘の音は高く低く、遠くから、しかしはっきりと聞こえてきた。教室はボロボロになった古い窯洞(ヤオトン)で、中は土間があるだけの暗くガラんとしたものだ。土間に作った炉からは煙が漏れブスブスとくすぶって、終日白い煙が上がっていった。煙が緩やかに立ち昇っている中で騾先生は私たちに字の書き方や読み方、数の数え方を教えてくれた。

騾先生が私たちに字を教えてくれるときには、紙も筆も使わなかった。何を使うかと言うと、それは手の指と鉢だった。鉢の中にいっぱいになるまで細かい砂のような黄土を入れ、指でその上をなぞり、字を書く。表面が字でいっぱいになったら、鉢を揺すり、土を平にする。すると、字は消えてしまう。再び書く、いっぱいになる、そしてまた揺する。“人、牛、馬、大、山、水、長……”いくつもいくつもの字が鉢の中に現れ、消えてゆき、一つ一つ私たちの頭の中に刻まれていった。ラバ先生は口の端にキセルをくわえ、私達の様子を見ては、

ススッとタバコを吸っていた。先生の半分くたびれた羊皮の上着は油でテカテカとしており、腰からは同じように黒光りした羊の皮でつくった煙草入れがぶら下がっていた。

“ダーン、ダーン、ダーン”授業が終わると外へ土を取りに行ったものだ。榆の老木の下にある土堀のところは私達の小さな頭で一杯になった。たくさんさんの小さな手、何本もの小さな腕が上へ下へと一生懸命になって動き回った。“サーサーサー”きめの細かい煙のような砂が私達の指の間から、手のひらから、こぼれ落ちて下に置いた鉢の中に落ちていった。それはまるでしゃれたカーテンのようであり、流れてゆく水のようにもあつた。

土を取り終わり、字の練習も終わると、私達はすぐに榆の木の下へ行き、射撃の練習をした。銃は大工さんに作ってもらった。形が出来上がるとそれに色を塗る。大黃の葉っぱを二枚ほどちぎってクルクルッと巻き、それで銃の上をシュッシュと擦ると、黄色のなかに紅色が浮き上がり、まるで油を塗ったように光ってくる。今度は墨汁を使って銃の先を黒く塗る。飾りに赤いリボンを付けてみた。穴を二つ空けて、背負い帯をつけ、銃を背負う。本物のような気分だった。私達は銃を背負って榆の樹の下に集まり、騾先生がお手本を示してくれるのを見守った。先生は若いときに兵隊として日本軍と戦ったそうだ。先生はくわえていたキセルを口から抜き出し、“バン、バン”と靴底にぶつけタバコを捨て、また腰のベルトに差し込んだ。羊皮の上着をさっと脱ぎ捨てるのと辺りに有った一本の榆の枝を取り上げた。“注目!”“気をつけ”と号令がかかった。先生は両手で“銃”を握り、しっかりと胸の前に抱え、少しも身動きをせず前方を見据えた。すばやく銃を前へ向けながら足を

踏み出した。左足を曲げ、右足を踏ん張り、手の中の銃を前に後ろに、左に右にと舞うように動かした。その姿は力強く勢いがあった。最後にクルリと身をひるがえし“撃て!”、まるで雷の轟きのような迫力だった。

驟先生はすでに九十歳の高齢になられたが今もお元気だ。榆の老木は今も枝は太く、葉をたくさん茂らせている。あの榆の木は二十数年も前のことなどまだ覚えているだろうか。

[2001年4月号から転載]

●李晴さんは、中国山西省太原市に住む女性作家です。故郷の河曲地方の生活を題材にした味わい深い作品を多く発表しています。2001年の‘わんりい’に寄稿頂き掲載しましたが、再び読み返してみても、私達が親しむ中国とは異なる、中国僻地の農村に住む人々の生活や心情を味わえるようです。折々の機会に‘わんりい’に掲載致します。(編集室)